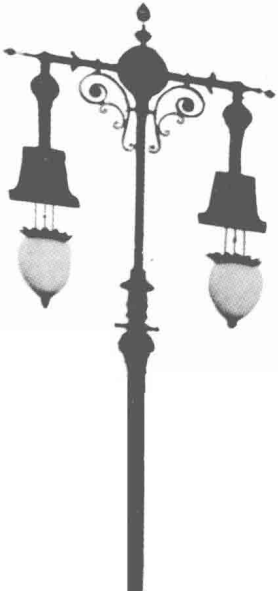
星新一

明治・父・アメリカ

明治・父・アメリカ

星新一



明治・父・アメリカ

一九七五年九月三十日　初版第一刷発行

著　者　星　新一

発行者　井上達三

発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
郵便番号一〇一―九一
振替東京六―四一二三

本文印刷　明和印刷
製本　永興舎

装　幀　真鍋　博

©星新一 1975　*Printed in Japan*　0093―80126―4604

明治・父・アメリカ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

1

だれでもそうだろうが、川をながめていると、いったいこれをさかのぼったらどうなっているのだろうと考える。なぜ、ここに川が流れているのだろう。上流のほうのようすを知りたくなるのである。

人生においても、そんなようなことがある。いつもは時の流れに身をまかせ、なにやら忙しく、一日一日をすごしている。しかし、ひまができると、少年時代のことを思い出す。

そこには父がいる。私の父は、私が大学を出て四年目ぐらいに死亡した。遠い追憶のなかの父は、いつもにこにこしていた。休日には幼い私たち兄弟を、動物園とかデパートの展覧会とか、時には郊外へとか、よくどこかへ連れていってくれた。会社の仕事で旅行に出た帰りには、いつもなにかしらおみやげを買ってきてくれた。

朝の食事はいっしょだった。私たちが学校へ出かけるのと同じ時間に、会社へと出かけていっ

た。父の帰宅はおそいことが多かった。会合などのためである。父は製薬会社を経営していた。しかし、酔って帰ることはなかった。酔って帰った父を見たことがない。

父にどなられた記憶もない。私は神経質なおとなしい少年であり、いたずらのたぐいをしたことがなかった。そのためかもしれない。あとで知るところによると、会社における父は、机をたたき床を足でふみならし、社員をどなりつけ、雷を落しつづけだったという。もっとも、それは一瞬の後にはけろりと忘れ、たれもなれっこになっていたらしい。しかし、家庭内で大声をあげたことは、まったくない。微笑をたたえていて、静かで、姿勢がよかった。

父はいつも、なにを考えていたのだろう。これもあとで知ったことだが、父は事業のことを考えていたのである。仕事そのものが生きがいだった。私の父に限らず、男とはそういうものなのであろう。

私が小学三年生ぐらいの時だったろうか。父は古本屋から、和とじの『大学』という本を買ってきた。『論語』『孟子』『中庸』とともに四書と呼ばれる本である。なかには漢字ばかりが並んでいた。父は私をきちんとすわらせ、それを開き、火ばしで一字ずつ押さえて読み、あとにつづけて読めと命じた。

ちょっと面白かったが、これから毎日そうなのかと思うと、これはえらいことだと、身ぶるいした。読めないと、火ばしでひっぱたくという。しかし、それは一回きりだった。なにかのことで自分の少年時代を思い出し、それを私にこころみたわけだろう。

一回きりにもかかわらず、私には印象的なことだった。昔の人はこうして字を習ったのだなと、

具体的に知らされたのである。

その時はじめて、父にも少年時代があったのだということに気がついた。それまでは、父とは、もともとおとなとして存在していたものだと思っていたのだ。新鮮な発見であった。

少年時代のことは、回想するたびに、なつかしく楽しい。終戦が私の十八歳の時で、恵まれた時代に育ったとは、とても呼べない。しかし、やはりなつかしく、忘れられぬことでいっぱいである。

私の父のそれはどうだったのだろう。父の若かったころのことを書いてみようと思いついた。父は生前に思い出を三回ひとに話し、いずれも印刷物となって私のところに残っている。

まず明治時代に杉山茂丸氏に対してである。それは『百魔』という本の一部となって残っている。つぎに大正十三年に「ダイヤモンド」という雑誌の記者の京谷大助氏に対してである。それは『星とフォード』という本となった。そして、死の二年前の昭和二十四年、大山恵佐氏に対してである。それは『星一評伝』という本となった。いずれも今は入手しにくい本である。

また、父の友人に荒川禎三というかたがあった。台湾で官吏をなさっていた。父は台湾で仕事をしたことがあり、官吏と民間人という関係なのだが、同郷ということで気が合い、断片的に追憶談をよくしたらしい。荒川氏はそれを「いわき民報」に連載された。

それらをもとに、まとめてみようというわけである。

いま私が生きて存在しているのは、父のおかげである。それは、父の父のおかげでもあるのだ。そのへんにさかのぼって、ふたたび流れを下ってみようと思う。世の移り変りも、ただの歴史書

とちがって、少しは実感をともなって味わえるのではないだろうか。

吹く風をなこその関と思えども道もせに散る山桜かな

風よ吹くな、の意味である。源義家の和歌。すなわち八幡太郎義家である。これをよんだ地が勿来であり、むかし関所があった。磐城国菊多郡、東北街道への入口である。茨城県から北の福島県にちょっと入った、海岸ぞいの場所である。いまはその一帯、いわき市に含まれてしまっているが、勿来からさらに少し北に行くと、その菊多郡に江栗村というのがあった。そこが父の郷里である。

徳川時代、このあたりは泉藩の領地だった。小藩である。山が海に迫っていて、米作に適した面積は少ない。気候はおだやかなのだが、ゆたかな土地ではない。しかし、藩は年貢を取り立てるために存在している。夏の終りになると、役人が収穫のぐあいを調べにくる。農民たちは、その判定のゆるやかなことを祈るだけだった。

こんな伝説が残っている。

むかし、ある年、夏祭りのころから狐火が毎夜のごとくあらわれた。火の点が列をなして移ってゆくのである。狐の嫁入りだろうかと話しあう者もあった。

そんなころ、役人がやってきた。そして、首をかしげる。なぜという原因もなく、その年は稲がみのらないのだ。

「これでは、いたしかたない」

ごく少ない額の年貢が申し渡された。わずかな米を藩にさし出せばいいというのである。しかし、農民にとってもありがたいことではない。納めようにも収穫がないのだ。食うことさえできない。近くに幕府の直轄地がある。そこへ移住したいと思っても、それは禁止されているのだ。

すると、なんということ。役人が帰ったとたん、稲は急にみのりはじめたのだ。豊作であるうえに、年貢はわずか。だれもかれも大喜びし、狐がわれわれをあわれんで、この異変を起して下さったのだろうと、うわさをしあった。

そんなことが起ってくれたらという農民のねがいが、この伝説をうみだしたのだろう。河川の治水がよくなく、雨が多いとしばしば洪水がおこる。そのため収穫が不安定。まずしく、かなしい地方だったのだ。

江栗村に星という苗字の家があった。平安時代の初期、大同年間に京の都から派遣され、この地に住みついた。先祖は加茂神社につながるという。

また、植田の城主に下山田という家があり、上遠野の城主に駒木根（こまぎね）という家があり、下川村には小野という館主の家があった。その四家が協力し、この一帯を統治していたという時代もあった。

しかし、それは遠い過去の栄光。戦国時代、徳川時代という歳月の流れのなかで、どの家もただの農民におちぶれてしまった。もっとも、どん底というわけではなかった。いくらかの余裕はあり、また家柄ということもあり、苗字帯刀を許されていた。村の世話役という格であった。

その下川村の小野権右衛門の二男として、弘化四年一月十日、佐吉という子がうまれた。二男ではあったが、まもなく長男が死に、小野家の相続人という立場になる。やがては村の世話役になるわけで、読み書きそろばんを習わされた。しかし、成長するにつれ、独特の個性を示しはじめた。

佐吉が十八歳になった時、縁談が持ちこまれた。好きになれば簡単に結婚できるという時代ではない。家の格の釣り合いを考えて縁組みがなされていたのである。

少しはなれた村に、鈴木平治平（へいじへい）という人がいた。農業のかたわら、米屋や質屋をやっている。ほぼ同格の家である。そこの娘に、十八歳のイチというのがいる。悪い組合せではないのではないか。

しかし、問題がひとつあった。鈴木家には男の子がなく、イチとの結婚はむこ養子となることを意味する。その話を聞いた時、佐吉は弟の権重（ごんじゅう）に言った。

「おまえはぐずだから、よそへむこ養子に行くという器用なことはできまい。この小野家をつげ。おれが出てゆくから」

そして、鈴木家のむこ養子となった。農業専門の小野家より、商業を兼業している鈴木家に魅力を持ったからでもあった。家業を手伝いながら妻のイチとのあいだに、イマ、常次郎という一女一男をもうけた。

いちおう順調に人生が進むかと思えたが、不幸なことに妻のイチに死なれてしまった。さて、どうしたものか。鈴木家は家長の平治平がまだ健在で、実権をにぎっている。佐吉がよそから後

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

妻を迎えたら、家庭内を複雑にするばかりである。イチにはイシという妹があり、それと結婚できれば無難なわけだが、イシはイチより十五歳したで、まだ幼女である。

おとなしくしていれば、やがては家業をつげるのだが、佐吉はそんな性格でなかった。相続人を作り養子としての役目もはたせたと、鈴木家を出た。

といって、小野家に戻るわけにもいかない。そこは弟の権重がついでいるのだ。仲のいい下山田佐司右衛門の家に身を寄せた。彼は佐吉の従兄に当るのである。そこへ入りこみ、酒を飲んでいばりながら日をすごした。そういうことのできる仲であり、また佐吉はそういう気性なのだった。

しかし、いつまでもそうしてはいられない。半年もたったころ、江栗村の星家との縁談が持ちこまれた。星家にトメという二十五歳になる娘がいる。それといっしょになる気はないかという話であった。

この時の星家の状態も複雑である。トメの両親は喜三太、ハルだが、喜三太はすでに死亡していた。その長男は喜三郎といい、コノという女と結婚し、喜一郎という男子がうまれたが、喜三郎も死亡、コノは実家に帰った。つまり、星家の構成は、ハルという老婆と、七歳になる孫の喜一郎。それに喜三郎の妹のトメの三人というわけである。

当時は医学が進んでいなかったので、だれが先に死ぬかわからない。このような家族が各所にあったのである。トメはしっかりした女性で、母と幼い甥の世話をし、そのため結婚の時期を逸しかけていた。

その話に、佐吉は応じた。
「おれも出もどりだ。ぜいたくは言っていられん。そのトメさんといっしょになろう。またもむこ養子だが、今回はトメさんの父親が死亡しているから、気が楽だ」
かくして佐吉はトメと結婚し、星家の人となった。そして、星家の当主の代々の名、喜三太と改名し、あととりである喜一郎の後見人という立場に立った。かつての小野佐吉、いまや星喜三太である。明治五年、満二十五歳の時であった。

その数年前、日本は明治維新という激動の時期がはじまっていた。鳥羽伏見の戦いをきっかけに戊辰戦争がおこなわれた。官軍、すなわち薩長土肥の軍と、幕府との戦いである。しかし、将軍の徳川慶喜に戦意がなく、ひたすら恭順の意を示し、幕府はたちまち崩壊した。そして、天皇の名によって五カ条のご誓文が発布された。

一、広く会議を興し、万機公論に決すべし。
一、上下心を一にして、盛に経綸を行うべし。
一、官武一途庶民に至るまで、おのおのその志をとげ、人心をして倦まざらしめんことを要す。
一、旧来の陋習を破り、天地の公道に基くべし。
一、知識を世界に求め、大いに皇基を振起すべし。

明治新政府の基本方針であった。幕府の封建体制はもう終りである。外国の文明をとりいれ、

新しい国を作ろうという意味である。

このご誓文の出されたのが四月、七月に官軍は江戸に入り、名称を東京と改めた。九月には年号を改め、明治元年となった。官軍とあくまで戦ったのは長岡藩と会津藩だけだったが、それも九月には降伏した。

いわき地方には小名浜という良港がある。戊辰戦争の時、官軍は船でここに上陸し、会津へとむかっていった。会津藩とちがって、このあたりの藩は幕府側とはいっても、どこも弱小。抵抗らしい抵抗はなかった。

明治二年。天皇が東京へ移り、そこが首都となる。北海道で抵抗していた幕府の家臣、榎本武揚もついに降伏。東京・横浜間に電信が開通。

しかし、農民たちにとって、そう大きな変化はなかった。新政府も中央での組織づくりに忙しく、地方までは手がまわらない。いままでの藩主、つまり殿さまを知事に任命し、各地方をおさめさせている。年貢は過去五カ年の平均を基準にし、とりたてていた。

明治四年。廃藩置県。

これも実生活に関係のある事件ではなかった。名称の変更である。泉藩は泉県と変り、まもなく海岸ぞいの二県との合併がなされ、磐前(いわまえ)県となる。さらに明治九年にいたって、若松、福島との合併がなされ、いまの福島県となるのである。

明治五年。二月、福沢諭吉の『学問のすすめ』が刊行される。九月、新橋・横浜間に鉄道開通。十二月、太陽暦が実施される。

「鉄道というものが、できたそうだ。とてつもなく早いものらしい」
そんな話が伝わってくる。このへんは東京から東北にむかう浜通り街道にそっており、いろいろなうわさが、いち早く耳に入るのである。
太陽暦の実施には、だれもが奇異の念を抱いた。十二月三日を以て、明治六年の元日としたのだ。約一カ月が、どこかへ消えてしまった形である。農民たちはあい変らず旧暦を使うが、公文書は新暦でなければならない。
よくわからないが、なにか新しい時代が来るらしいとの印象を受けた。佐吉がトメと結婚し、星喜三太となったのは、そんな時期だったのである。
福沢諭吉のあらわした『学問のすすめ』が東京からもたらされた。喜三太はそれを入手して読んでみた。
まず「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずといえり」という文ではじまっている。人はだれもが平等であることを説き、学問の有益なこと、各個人の独立心の大切なこと、政治とは民より委任を受けてその代理としておこなうものであること、節を屈してまで政府に従ってはいけない、そういうことが書かれているのである。
喜三太は、なるほどと思った。五カ条のご誓文は抽象的すぎてぴんとこなかったが『学問のすすめ』は、わかりやすく説明してくれている。これが本当なのだろう。
目ざめさせられたような気分になり、喜三太は感激した。それを形にあらわすため、まげをやめて、髪をざんぎり頭にした。散髪の自由は明治四年に新政府によってみとめられていたが、都

会はべつとし、それをやった者はこのあたりにはいなかったのだ。武士はどう、農民はどうと、昔ながらのしきたりに従って、まげをゆっていたのである。

「星のところへ来たむこは、頭がおかしいんじゃないのか」

そんなことを言う者もあり、評判になった。人の目をひくため、気まぐれにやったのではない。来るべき時代に共鳴してやったのだ。他人にもすすめる。断髪する者がしだいにふえていった。

その明治六年の十二月二十五日、トメとのあいだに男の子がうまれた。喜三太にとっては三番目の子だが、ここ星家においては長男である。どう命名したものか迷ったあげく、かつての自分の名をつけた。佐吉である。これが私の父なのだ。

この年、政府によって地租改正がおこなわれた。米で年貢をおさめていたのをやめ、金銭で税をおさめるようにしたのである。とまどう者が多かった。喜三太はあれこれ相談を受けた。そういう立場にあったし、新しいことに関して彼なら教えてくれるだろうとたよられたのだ。喜三太はあれこれ調べて、その指導をした。そういったことが好きなのだった。やっているうちに、さらに新しい知識も吸収できる。

江栗の北のほうに、平（たいら）という町がある。いわき地方の中心である。そこに郵便局のできたのが、明治五年であった。局長以下すべて、みな士族。つまり、かつて武士だった人たちである。頭はちょんまげで、刀をさしていばっている。

「苦しゆうない。切手をはって置いて帰れ」

徳川時代そのままである。日本の郵便制度を作り、その役所の初代の長となったのは前島密だが、実情を知って、このような通達を出した。

〈郵便事業は大衆が相手であるから、庶民の立場に立って、商人風に心がけよ〉

上からの命令には従わないわけにいかない。それによって応対がよくなったが、こうなると庶民のほうがいい気になる。

「何通も出すから値段をまけてくれ」

「出しに来たのだから、お茶ぐらい出せ」

ユーモラスな話だが、時勢は少しずつ変ってゆく。

明治六年。征韓論がおこり、それがいれられず西郷隆盛らが官職を辞した。七年。東京の銀座にはじめてガス灯がともる。八年。東京・青森間に電信開通。

この明治八年に、星家に長女のアキがうまれた。佐吉の二つとし下の妹というわけである。

明治九年。廃刀令が出る。士族も刀をさしていばっていられなくなった。十年。そんな士族たちの不満が高まり、西南の役となってあらわれた。九州において西郷隆盛をかついで、政府の軍と戦ったのである。しかし、鎮圧され、西郷隆盛は自刃。一方、この戦いのあいだに、最初の大学である東京大学が設立された。

十一年。東京に株式取引所ができる。十二年。教育令が出された。学校制度は明治五年に作られていたのだが、フランスのをそのまま持ちこんだため、わが国に合わないとの声が出て、文部大輔の田中不二磨が教育令を出したのだ。これによって、日本の教育はアメリカ的なものへと変

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook